ヨーロッパ歴史の旅

昭和三十九年十一月二十七日から十二月二十二日まで
四国新聞に掲載されたものです

著者の好きな花「しゃくなげ」

白川隆久

坂出高校教諭　白川隆久

①

市内の各所に遺跡

思いだされる歴史の数々

ローマ

先月、私は高校教員を主体とした欧米高校教育事情視察団の一員としてアメリカ、イギリス、イタリア、フランス、西ドイツ、スウェーデンの六カ国を旅してきました。私は専門が歴史ですから、この機会にできるだけ史跡を見学しようと考え、事前に了解をとり、それを実行しました。したがって単独行動をしなければならないことが多く、単独行動ですから当然旅行業者も通訳も世話はしてくれません。

言語の異なるいろいろな国で、そのうえ経費の節約も考えねばならないのでバス、汽車などを利用し、できるだけタクシーを避けねばならず、その苦労はたいへんなものでした。それにもかかわらず毎日が非常に愉快でした。それは学問への情熱と偉大なる芸術による人間性のめざめの日々だったからだと思います。

私は自分の目で確かめ、足で歩いた史跡の解説を中心に、見聞した人情、風俗、さらには考えたことがらをも織りまぜながら表現してみたいと思います。

私の乗ったジェット機はローマのレオナルド・ダ・ビンチ空港に到着しました。この空港の名はルネサンス時代の万能の天才レオナルド・ダ・ビンチが飛行機の構想を持っていたことを記念して名づけられたものです。（空港のすぐ近くにレオナルド・ダ・ビンチの像が立てられています）

空港から市内の中心終着駅までバスで約四十分、途中市内のいたるところに古代ローマの遺跡があります。コロシアムもフォロ・ロマーノもパンテオンも古代ローマ帝国の城壁もローマ市の中心地域にあります。

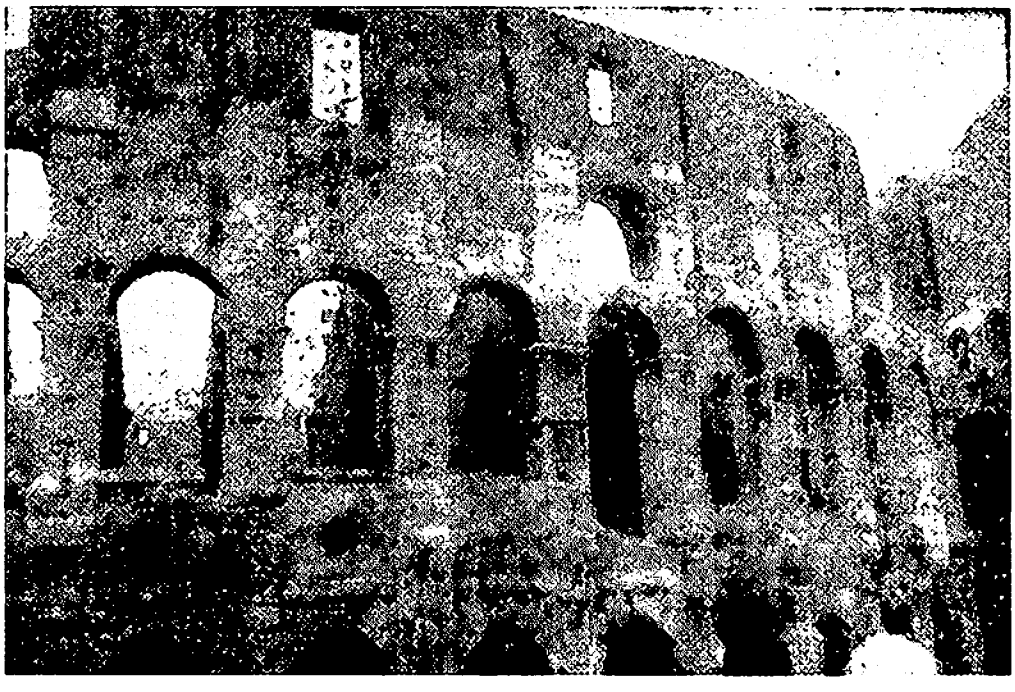
有名なコロシアムはコンスタンチヌス帝（キリスト教公認で有名な皇帝）の凱旋門のすぐ近くにある巨大な競技場です。俗説ではネロ帝がキリスト教徒を迫害した時、ここでキリスト教徒を猛獣に食べさせたといわれていますが、実はこの競技場はネロ帝のあとをうけて帝位についたウエスパシアヌス帝によって着工され、帝の子ティトウス帝の時代に完成したものでネロ帝とは関係がないようです。

コロシアムでは剣奴の試合、模擬海戦（水を入れて行なった）猛獣との格闘などが行なわれました。ローマでは奴隷（人間であるにもかかわらず家畜とみなした。戦争による捕虜が多い）の一部に剣の練習をさせ、それを剣奴といいましたが、剣奴同志に真剣勝負をさせ、どちらか一方が倒れるまで戦わせ、一方が重傷を負ったとき観衆がハンカチを振るか親指を上に向けると助けて手当てをするが、親指を下にむけると殺せということでした。数多くの剣奴の戦いで親指を上に向けたことはまれであり、やさしかるべき婦人までが「殺せ、殺せ！」と叫びながら親指を下にむけたものでした。しかも血の海と化した競技場の中で平気で食事を楽しむという残酷な面がありました。スパルタクスの乱もこのような状態に耐えかねて起こった剣奴の反乱でした。（映画を見た人も多いでしょう）

フォロ・ロマーノは古代ローマの広場という意味です。古代ローマの政治、経済の中心地です。多くのバシリカ（裁判や取り引

きなどに使われた公共建築物）の廃虚や神殿のざんがいがこの広場の中にあります。皇帝になろうとの野心を燃やしたシーザーに対し共和制の伝統を重んずる元老院議員らがシーザーを暗殺したのは紀元前四四年のことでした。（ブルートスお前もか！がシーザーの最後のことばになります）その直後、シーザー部将アントニウスは弔い演説で巧みな弁論を行ない、暗殺者カシアスブルートスらを弾該し、形勢を逆転させますが、その演説はこの広場において行われました。

フォロ・ロマーノには南国の明るい陽光を浴びてカストル神殿のざんがい一白い大理石の三本の柱が輝く。二千年の歳月が石柱に、建て物の礎石に、城壁に、赤レンガのへいにしみとおり、私はそこを離れることができませんでした。



コロシアム（長径一八八メートル、短径一五六メートル、ダ円形。高さは四八・五メートルあり、八〇年に完成）

坂出高校教諭　白川隆久

②

世界最小の独立国

人口千五百のバチカン

ローマ

パンテオンは紀元前二十七年からアウグストウス帝の名臣アグリッパが造らせた神殿ですが、現存するものはハドリアヌス帝が二世紀はじめに改築させたものです。ほとんど完全な姿で残っているこの神殿をみるにつけ石像建築物の強固さを思い知らされました。床には美しい大理石が敷きつめられ天井にある直径九メートルの円形の穴から(天井が高いので小さく見えるが)そそぎこむ光りで室内のあかりとりになっています。

「映画「ローマの休日」やアンデルセンの「即興詩人」で名高いスペイン広場からフラミノ通りを北上しますとチベル河を越えます。チベル河水はいつも黄濁していますのでビヨンド・チベレ(英語ではブロンド・チベル)とよばれています。不思議な深淵さをたたえたチベルの流れに古代ローマ以来のミルビウス橋が悠久二千年の歴史を秘めてかかっています。(古代ローマの橋で現存するものは五つあります)

ミルビウス橋のすぐ北側はコンスタンチヌス帝が僭称帝マクセンチウスと戦った古戦場です。伝説によればコンスタンチヌス帝は夢の中で十字架の印を楯につけて戦うようにとのお告げをうけ、これを実行しました。戦いは彼の大勝に終わりました。(三一二年)彼は勝利をキリスト教の加護によるものと考え、翌三一三年、キリスト教を公認したといわれています。

ここからチベル河に沿って南下しますとバチカンへ着きます。バチカン市国は法王庁(宮殿)とサン・ピエトロ寺とその前の広場から成り立ち、面積〇・四四平方キロ、人口約千五百人の世界最小の独立国です。

バチカン市国がイタリアの中にあり、しかもローマ市の中にあり、税関も入国手続きもありませんので独立性についての実感がここを訪れるものにもピンとこないようです。また独立国ときいてもその過去の経緯を知らない人には感慨の湧かないのも無理はないと思います。この旅行中、同行者の多くの方からこの点についての質問をうけてインテリと目される人すら経緯を知らない事実に直面しましたので簡単に説明しておきましょう。

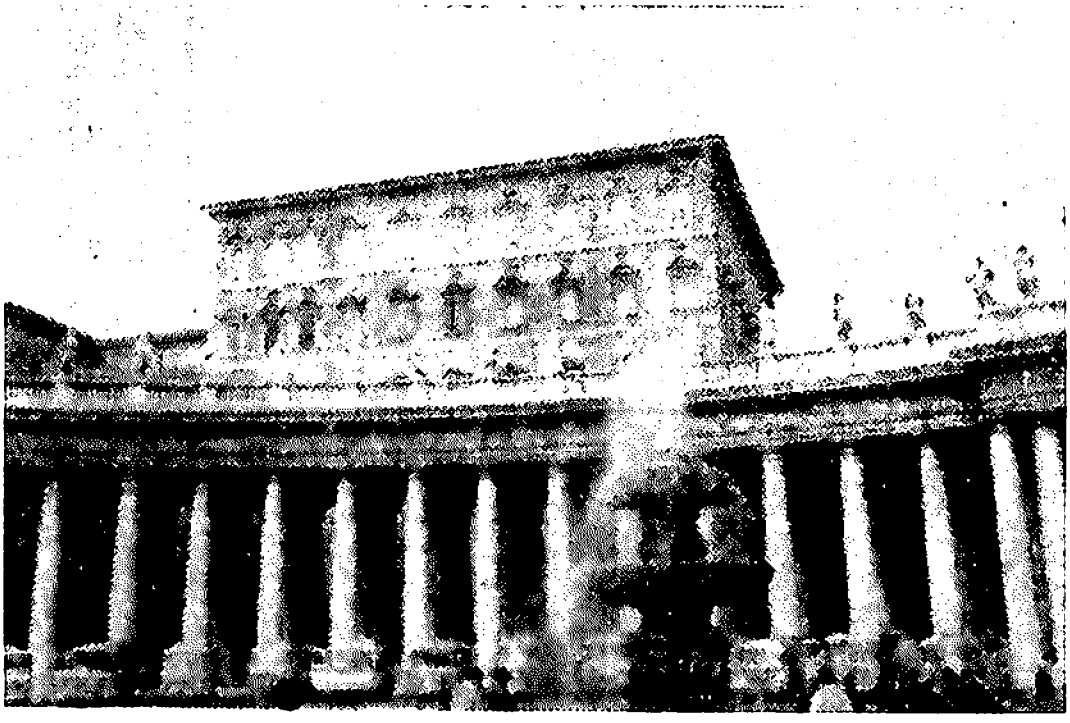
ローマ・カトリック教会が領土を持つようになったのはフランク王国の王になったピピンが領土を献上したのがはじまりです。(今から約千二百年前のことです)以後、中世の時代はキリスト教の全盛時代で法王領は北、中イタリアに拡大されました。しかし近代になりますと宗教改革がおこり、やがてナポレオンの馬ていにかけられ法王領は縮小されていきます。今から約百年前、イタリーの統一がなしとげられます。その時、法王領はイタリー王国に領土をとられてしまい法王は自らを「バチカンの囚人」と称してイタリー王国と絶交状態になります。ムッソリーニが政権を獲得し、法王との和解が成功して一九二九年、今日のバチカン市国が独立国家となります。バチカン市国の王として、また全世界五億のカトリック信者の総師として、法王は国際政治にも大きな影響力を持っています。バチカンはまたフジオ・ファティカーノを持ち、貨

幣、切手を発行し、各国に外交官を派遣しています。

バチカンの広場から見るサン・ピエトロ寺(セント・ペテロ寺、ペテロの墓の上に立てられたと伝えられる)の迫力はたしかにすばらしい。ドームの部分はミケランジェロの設計になる。完成は彼の死の間際であったらしい。

サン・ピエトロ寺へはいった日は、ちょうど日曜日、法王臨席のもとに荘厳な礼拝、賛美歌の大合唱が行なわれ、信者が広い聖地の中に充満していました。

翌日、私はタクシーをアッピア沿いのカリストのカタコンブへ向けて走らせる。カリストのカタコンプとアッピア街道のひとり歩きを楽しみたい。これが日本を出るときからの私の最大の念願でありました。ローマのタクシーは油断ができない。(私が千リラ一日本円で約五百円一で走らせたところを同僚は四千リラとられた。バチカンからホテルまで。ただし私は車中「ストレート」を連呼しつづけた)



バチカン市国ローマ法王庁すぐ左側にサンピエトロ寺院がある

坂出高校教諭　白川隆久

③

カタコンブに感涙

威風示すアッピア街道

ローマ

ホテルに呼んでじゅうぶん話をつけてから車に乗る、カリストのカタコンブにつく、運転手に帰れといっても待つという。さらに帰りにタクシーはないという。なくてもよいからと無理に帰らす。ヨーロッパでは待ち時間の間にメーターはどんどんあがる。走行距離による料金でないのは車の償却代やガソリン代と違い、人間の労働時間に対する料金との考えらしい。

カタコンブは初代キリスト教時代の地下墓地であり、また信者が迫害をさけて祈りを行なうために集まった場所でもあり、アッピア街道沿いのカリストのカタコンブが最大のものです。僧の案内で地下幾層にも掘りめぐらされた暗い迷路の中にはいって行く。延々と続く迷路、その側面には信者の死体を埋葬した横穴が無数に掘られていました。初期の法王を埋葬した場所や集会に利用された広場もあり、壁面のところどころにはキリスト教徒の暗号である魚の絵も描かれていました。ローマ帝国のもとはげしい迫害に耐え、信仰を守りぬこうとする人々の悲しいまでに崇高な精神と気力がこのようなカタコンブをつくらせたのだと思うと目頭が熱くなってきました。この時代のキリスト教の苦難を示す遺跡と今日バチカン市国にさく然とそびえ立つサン・ピエトロ寺院を対比するとき今昔の感にたえませんでした。

カタコンブを出て、イタリア松(松かさはソフトボールぐらいの大きさ)の並み木が美しい細道をえらびアッピア街道に出ました。

ローマ花やかなりしころ「すべての道はローマに通ず」といわれ、ローマを中心に放射状に道路網が完成していました。その道の中の女王ともいわれるのがアッピア街道(ブィア・アッピア・アンティカ)です。街道の石畳の道は歩きにくく疲れた足を引きずるようにして歩きました。黒い敷き石は注意してみると車のわだちでけずりとられた跡もありました。道の両側には城壁の残骸や、見張りに使われた保畳の遺跡が随所にあり、また二千年は経過したであろう石柱に補強をして現在使用されている民家もありました。

数多くの戦いに勝利をおさめた凱旋将軍はこの沿道を埋めるローマ市民の歓呼の声に迎えられながら威風堂々とセバスチャン門へと向う。またあるときは地中海沿岸の属州へとローマの騎馬伝令が夜を日について疾駆する。そんな光景がほうふつとしてきました。

やがて私はアッピアと他の道との交差点にもどってきました。そこにドミネ・クオ・ヴァディス教会がありました。小さな教会の中には熱心な信者が三人祈りを捧げていました。正面祭壇の上部右側にキリストの姿が、左側にペテロのひざまずいている絵が描かれていました。ネロ帝の迫害をうけ、おそろしくなったペテロはローマの信者たちを見捨ててローマを脱出しようとこの道にきた時、イエスの姿が現われました。ペテロはひざまずいて「主よ、いずこへ」(クオ・ヴァディス・ドミーネ)と問います。イエスの答えは、「お前がローマの小羊たちを見捨てるなら、

自分がローマへ行き、もう一度迫害にあって死のう」とのことでした。ペテロは自分の非を悟り逃げてきた道をひきかえす。そしてネロ帝の迫害にあって殉教しました。(シェーンキヴィッチの名作「クオ・ヴァディス」をご存じの方も多いでしょう)

セバスチャン門までもどってきた私はタクシーを拾おうとしますが、どうしても拾えません。ついに意を決して自家用車を止めます。英語はほとんどわかりません。この人は嫌な顔をしましたが、タクシーが拾えなくて困っているのだと身ぶり手ぶりで説明し「ツウ・バチカン」というとようやく乗せてくれました。バチカンへ向けて走ります。途中は、君は日本人だろう(カメラを二台持っていましたので、どこへ行っても日本人だろうといわれました)とか、タクシーだったらグルグルまわって高い料金をとられるから注意しろうというようなことを片言の英語でしゃべります。

バチカンの広場へつきました。金は受け取ろうとしませんのでポケットの中にはいっていた百円銀貨(東京オリンピック記念)と心ばかりのものをお礼に渡すと大変な喜びよう。四十を過ぎた大男が喜びの表情をいっぱいに表現しながら私に抱きついてきました。イタリア人の中にもこのような親切な人もいます。

カタコンブの内部(側面の横穴が信者を埋葬したところ)

坂出高校教諭　白川隆久

④

政宗の書簡に接す

バチカン博物館ぼう大な絵画、彫刻

ローマ

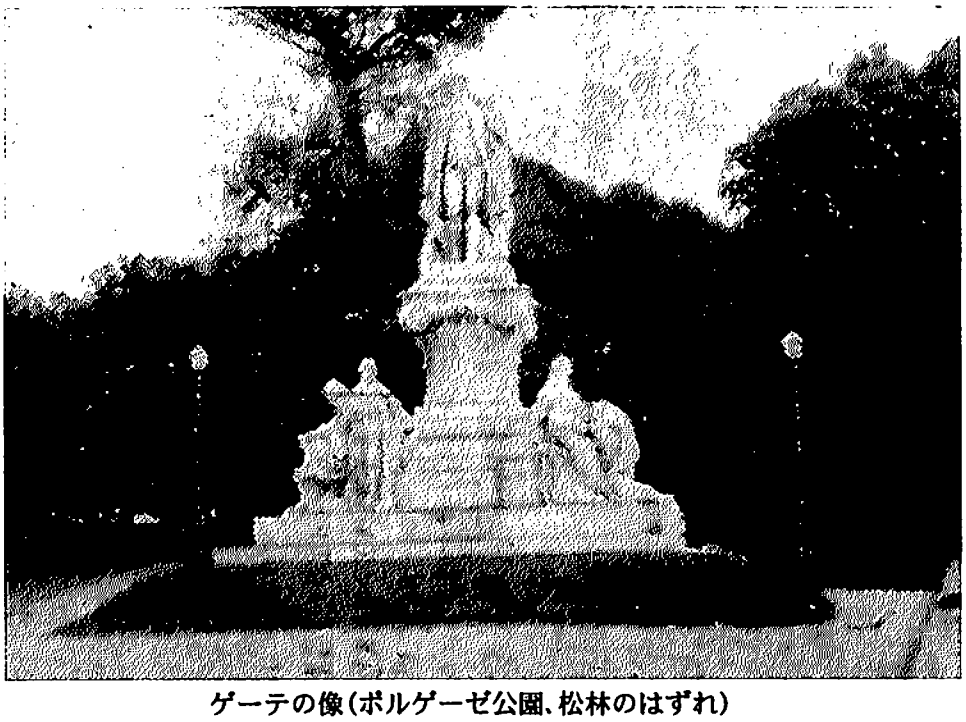
イタリア人は一般に人なつこく、喜怒哀楽の感情をそのまま表情にあらわす人が多く、単純で陽気な人たちです。その点北欧の人たちとは随分違います。しかし怠け者が非常に多い。スペイン広場でも、バチカン前の広場でもいたるところでフラフラしている人が多い。昼食時の休み時間が三ー四時間にもおよび、資源の乏しい国でこんなに怠け者が多くては物価も高く、国力も発展しないのが当然だと思いました。

乞食が多いのも有名ですが、バチカン・サン・ピエトロ広場を歩いていて小学生位の年ごろの男の子と女の子からたばこをくれとせがまれたのにはびっくりしました。ついでにたばこは非常に高く四百リラ(約二百円)出しても「新生」以下の味です。たばこ屋ではバラで売っているのを二本、三本と買っていく人がかなりいます。

バチカン博物館へ入ります。入場料は五百リラ(約二百五十円)想像していたよりもはるかに広い。ぼう大な量の絵画、彫刻が並べられています。限られた時間ではとても見きれるものではありません。焦点をしぼって見ようと考えました。焦点はシスティナ礼拝堂のミケランジェロの天井壁画と伊達政宗の書簡にきめました。広い長い廊下を歩きながら見まわしますが目ざすものはどこにあるのか見当もつきません。多くの人が廊下を通りますが日本人の姿は見かけません。ついに意を決して通りかかりの外人宣教師に話しかけました。お互い片言の英語、メキシコの宣教師だとわかります。伊達政宗の手紙のことが仲々通じません。ここで私は日本人、日本とメキシコは古くから交際があった。メキシコの古い名はノビスパン(ノビスパニア)というと彼は顔をほころばし、お互に親密な感情がかよいあう。私は伊達政宗は家来の支倉六右衛門常長をローマへおくる、途中ノビスパンに寄る、その伊達政宗の手紙…ついに分かりました。彼はビブリオテーカという。そして私の手を引っぱって歩く。私がパピルス(エジプトの紙)→ビブロス(フェニキア語で紙)→ビブリオン(ギリシャ語で書物)→バイブル(聖書)→ビブリオテーカ(図書館)かと問うと彼はワンダフルという。

親切にもビブリオテーカ(この図書館の中には五十万の古文書類があるとのこと)内の伊達政宗の書簡の前に連れて行ってくれました。ガラス張りの陳列机の中に金砂子の巻き紙に見事な達筆で書かれた政宗の手紙が納められていました。ちょっと見ますと法王パウロ五世のあて名が「はんむ、ぱうろ様」みたいに見えますが、よく見ると「はうお、ぱうろ様」です。慶長十八年九月四日の日付けと伊達陸奥守政宗の署名、花押は実にはっきりとしています。私の力では短時間の間にこの手紙を読み切ることはできません。幸い日本を出発する前、幸田成友の「日欧通交史」を読んでいましたのでその知識をもとに書かれている字体を追ってみました。大意は「宣教師ルイス・ソテロ」の説教を聞いてキリスト教が殊勝であることを知った。自分はある事情があって今は改宗できないが、領

内しもじもに信仰させたいから
フランシスコ派の教師を派遣し、
司教一人を任命してください。
教師に対してはじゅうぶんな保
護を加える。この気持ちを伝え
るためにルイス・ソテロおよび
家臣支倉六衛門を貴地に派遣す
る」。



ゲーテの像（ボルゲーゼ公園、松林のはずれ）

坂出高校教諭　白川隆久

⑤

あふれる立体感

ミケランジェロの壁画

ローマ

そこからさらに彼の案内で長い廊下を渡り、システィーナ礼拝堂へはいりました。

ここはローマ法王(ローマ教皇ーキリストの使徒ペテロが初代教皇、前教皇はヨハネス二三世、現在はパウロ六世で第二六五代)の選挙が行われるところです。カトリックの僧侶は結婚できません。したがってローマ法王の地位は世襲ではありません。枢機卿(カージナル、日本人は現在一人だと思います)の互選によって選ばれます。その選び方がむずかしく長い間かかって根気がいります。ラテン語ではこの選挙をコンクラーベといいます。ここで礼をのべて彼と別れました。

ミケランジェロの天井画、旧約聖書のいろいろな物語りが天井一ぱいに描かれています。「天地創造」「楽園追放」等々、いずれも人体は立体感をもって迫ってくるようです。どんな手法だろうか、浮き彫りを思わせるような立体感です。正面奥まったところは「最後の審判」これまたものすごい迫力です。天井と正面から迫ってくる迫力に比べると左右側面の壁画は力がたらずアンバランスな感じがしました。

私はミケランジェロのエネルギーのとりこになってしまい、約一時間並べられている長椅子のあちこちに席を移して天井と正面から迫る壁画にみとれました。

ローマは彫像と噴水の多い町です。カンピドリオ広場のマルクス、アウレリウス帝の騎馬像、テルミナ駅近くのビクトル・エマヌエル二世像、ジャニコロの丘にさっそうと立つガリバルディー像等等。

イタリア人にとってはイタリア統一(一八六一)の中心になったサルディニア王ビクトル・エマヌエル二世や、それを助けた宰相カブール、義勇士ガリバルディーなどに対する尊敬の念が強いらしい。彼らの名を冠する通りも多い。事実カブールは徹底したマキァベリストであったろうし、ガリバルディーも好戦屋にすぎなかったかもしれない。しかしイタリア人はそういうことをせんさくしないらしい。驚くべきことには独裁者ムッソリーニにさえ暖かい感情を持っていると感ぜられました。

ローマには清冽な水をふき出す噴水がいたるところにあります。それを列挙すれば枚挙にいとまがありません。私はすでにローマについて語りすぎたようだ。バロック様式の典型トレヴィの噴水にコインを投げてローマの町と再び相見える日の来らんことを念じつつローマを去りました。(この噴水に貨幣を投げれば願いごとが叶うとか再びローマへ来ることができるといわれています)

ビクトル・エマヌエル二世記念館(中央の騎馬像がエマヌエル二世) ㊤ と
セバスチャン門

坂出高校教諭　白川隆久

⑥

偉大な大英博物館

タクシーのチップに驚く

ロンドン

きょうの私の予定は午前中は大英博物館(ブリティシュ・ミュージアム)午後はウインザー城です。同行者は栃木県宇都宮の長谷川氏。宿を出てタクシー・ステーションをさがします。ヨーロッパでは流しのタクシーはほとんどありません。空車に手をあげても止まってはくれません。タクシー・ステーションに並んで待っています。こんでいるときは順番に並んでタクシーを待ちます。

ロンドンのタクシーはおそろしく古い型で色も黒ぬりばかりです。しかし乗り心地は安定感がありがんじょうにできています。保守的であり実用性を重んじるイギリスの国民性のあらわれだろうと思います。客席と運転手席とはガラス窓で仕切られており、話をするさいは小窓をあけて話します。

料金は運転手席にある料金メーターの数字を見て客席の料金表を見ます。客席の料金表は黒の数字の横に赤の数字(チップを含めた料金)が並べて書いてあります。料金メーターの数字と黒の数字を照合しその横の赤の数字の金額を支払います。

チップがきちんと定められていますからチップをいくら出そうかと心配する必要がない。その点親切ではあるが、半面ガメツイとも考えられます。こうなるとチップも正規の料金みたいです。チップは本来心づけのはずです。正当な料金をとっておきながら、万事にチップがいる欧米の社会習慣は変なものだと思います。チップを多くもらうとペコペコする。少ないといやな顔をする。私はサービスは親切心のあらわれであって金銭によるものではないと思うのですが、欧米では金銭が物をいうようです。金銭によって人を動かす、動かされる方は金額の多少によって態度が変わる。そこに一時的な主従関係ができるように思え、西欧封建制の名ごりではないかとさえ思いました。西欧近代社会の自賛する個人の尊厳、人格の自由はこの点では完全にから念仏のように思えました。

私の経験ではローマとニューヨークが特にチップがひどかったと思います。ニューヨークではタクシーから降りるときチップが少ないと、「サンキュー」ですが、多いと「サンキュー・サー」になります。まさに「金がものいう」ニューヨーク」です。

いよいよ待望のブリティシュ・ミュージアムにつきました。堂堂たるイオニア式列柱(古代ギリシャの神殿建築の列柱の様式名で、柱の頭の部分にほとんど飾りのない荘重な様式がドーリア式、柱頭の部分がカールした飾りになっており優雅な様式がイオニア式、柱頭に花もようのような華美な飾りがついている華麗な様式がコリント式です)

ここは博物館と図書館が併設されています。係りの人に切符売り場はどこかとたずねますと「無料、博物館は公共のものだから無料だ」と胸を張っていいました。(この点は多いに感心しました)

たしかに大英博物館は公共のための博物館です。その目標とするところが単に高価な美術品のコレクションではありません。原始時代の石器から現在に至るまでの人類文化の足跡がたどれ

るような数々の遺品、また地域的に見ても、オリエント、ギリシャ、ローマ、中国、日本のほかマレーシア、ポリネシアと多種多様のもので、市民が常識を養い、学問を身につけるためにつくられた殿堂ともいうべく、偉大な歴史博物館といえると思います。

大英博物館の内部はぼう大な作品群の集積ですのでよほど注意しないとかなりの時間をかけても貴重な作品を見落とすことになります。まして私のように短時間しか費やすことのできない旅行者はなおさらのことです。とにかく博物館内を一巡してその上で特に見たいものに焦点を定めようと相談がきまりました。ところが一巡だけでたいへんです。エジプト室をはじめ、アッシリア)バビロニア、ギリシャ、ローマ、ペルシア、エドワード七世、エルギンの各室と歩くと足が棒のようになってしまいました。時間も刻々とたってゆきます。

焦点を定めました。まずエジプト室、それからギリシャ、ローマの彫刻、特にエルギン・マーブル(大理石の彫像)のフィディアスの作品、さらにエドワード七世ギャラリーの「女史箴図巻」です。

大英博物館(イオニア式列柱)

坂出高校教諭　白川隆久

⑦

ロゼッタ石に感無量

フィディアスの作品漂う「力強さと清純」

ロンドン

エジプト室はいくつかの室に分かれています。その一室に有名なロゼッタ石(ロゼッタ・ストーン)がありました。このあまりにも有名な石碑はナポレオンがエジプト遠征を行った時、その部下がナイル河口のロゼッタで砂洲に半分埋もれていたのを発見したものです。戦いは結局イギリスの勝利に終わり、イギリスは戦利品としてこの石を持ち帰りました。

ロゼッタ石の上段は神聖文字、中段は民衆文字、下段はギリシャ文字で書かれていました。上、中二段が古代エジプトの文字です。幸いなことに同内容の事柄が三通りの字体で書かれていました。(ギリシャ文字が使われていたのは、当時のエジプトの王家がプトレマイオス家であり、先祖はアレクサンダー大王の武将でギリシャ系だったからでしょう。この王家の最後の女王が有名なクレオパトラで、彼女はギリシャ系の美人です)

下段のギリシャ文字を手がかりにして多くの学者がエジプト文字を解読しようと努力します。結局フランス人のフランソワ・シャンポリオンが解読に成功しました。(文意は、王の減税に対し、神官たちが王を賛えたもの)かくして古代エジプト文字が読めるようになりました。ロゼッタ石はガラスの陳列机に納められていました。私は懸命にシャッターを切りましたが、光線の関係で良い写真はとれませんでした。

エジプト室の一室には彫刻がずらりと並び、また他の一室にはミイラばかりが収めてある室がありました。ミイラの数、約三十体、くずれかかったものもあり、布でまいた完全な姿で残っているものもあり、布に美しい彩色が施こされているものなど各種ありました。二人の美しい女子学生がそのうちのくずれかかった一体をスケッチしていました。

博物館内の撮影は大体どこも自由ですが、(大英博物館でもルーブル博物館でも)フラッシュをたくことは禁止されています。光線不足でうまくうつらないだろうと考え、無駄だとは思いながらシャッターを切りました。ところが意外にもよくとれていました。これなら全部とってきてミイラ写真展でも開けばよかったと思いました。

エルギン室も四室あります。そこにはエルギン卿トーマス・ブルースのコレクションがおさめられています。そのコレクションはアテネのパルテノン神殿(今から約二千四百年前、ギリシャのアテネで指導者ペリクレスの時代に建てられた神殿)を飾った彫刻が大部分です。イギリスの駐トルコ大使であったエルギン卿は今から約百六十年前、日ごとに荒れていくパルテノン神殿のようすをながめてこの重要な人類の文化遺産を守ろうと考え、取りはずし費、運搬費に多額の私費を投じてイギリスに持ち帰りました。

エルギン・マーブル(エルギンの持ち帰った大理石彫像)の大半はフィディアスの作品です。

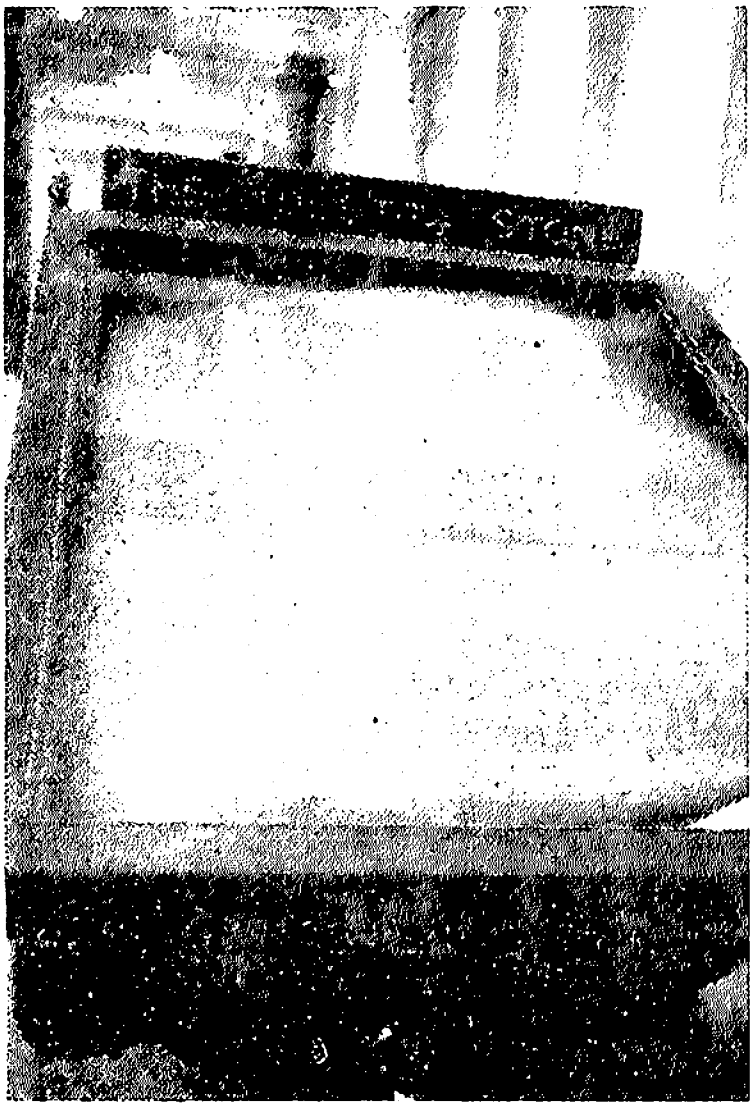
紀元前五世紀、巨匠フィディアスのノミは神々しいまでに美しい大理石像を彫りあげます。女性を彫っても肉感的な表現は感じられません。そこに漂うものは力強さと清純さとです。ど

の作品にもヘレニズム時代の作品のような末梢神経を振動させるような大げさな表現がありません。端正であり、沈潜する美であり、威厳があると感じられました。

今日、ギリシャではパルテノン神殿はドーリア式列柱を残すのみで中はもぬけのカラです。今日、世人、ことにギリシャ人はエルギン・マーブルをさして「エルギンの略奪」といいます。特にエルギンが地上に落ちているもの、くずれかかったものだけでなく、しっかりとしている欄間の彫刻をも無理に取りはずして持ち帰ったことを指摘し、「さすがはアングロ・サクソンの山賊の血とノルマンの海賊の血を先祖から受け継いだイギリス人だけのことはある」と激しく非難します。

大英博物館内には、世界の名品、至宝がたくさんあります。よくもまあ集めたものだと思います。

中央アジアの探検で有名なオーレル・スタインの持ち帰った「敦煌の経典」や「敦煌画」また大英博物館の至宝です。敦煌（とんこう）洞くつ内に埋もれていた仏教経典については井上靖氏の小説「敦煌」の中に興味深く書かれており、私の愛読書の一つです。



ロゼッタ石（大英博物館で）

坂出高校教諭　白川隆久

⑧

貴重な数々の経典

敦煌の千仏洞から運ぶ

ロンドン

敦煌は絹街道の重要な結節点であり、中国から中央アジアへの門戸にあたり、有名な千仏洞は多くの石仏で飾られています。この千仏洞の一部に経典や文書がかくされたのはおそらく十世紀末であろうと考えられます。(この付近が戦乱にまきこまれたとき、これらを残そうとしてかくされたものでしょう)スタインは今から約六十年前、千仏洞の番人、王円籙、王道士)を安いお金で買収して多数の経典類(古いものは約千六百年前のもの)をイギリスへ運びました。つづいてフランス人のペリオがやってきて多数の経典類をフランスへ運びます。やがて日本の大谷探検隊の橘端超がスタインやペリオの取り残したものを持ち帰ります。(王道士は後になって責任を問われて死刑にされたといわれます)中国ではスタイン、ペリオ、大谷の三探検隊を「文化上の三盗賊」と呼んでいます。

中国の国宝ともいうべき「女史箴図巻」(じょししんづかん)これまた大英博物館を飾っています。これは五世紀はじめ東晋の顧愷之が「女史箴」という詩から題材をとって貴婦人の心得の種々相を描いたものだと伝えられますが、現存するものはおそらく隋、唐時代の模写だろうと考えられます。しかしながら模写としても唐初をくだらない絶品で原画の趣を忠実に伝えたものと思われます。

このような貴重な文化財が流出したことはその国の人たちからみれば悲劇であり、残念であろうと思います。

文化上の先進国ではわれわれが早く気づき、完全な設備のもとで保存したからこそ貴重な人類の文化遺産が守れたのだと恩着せがましくいいますし、反対に文化上の後進国では正当な代金も支払わず国宝を奪った盗賊だとののしります。その良否の判断は読者におまかせするとして、次のことは仮定ですが、もし日本の最も大切な文化財が欧米の博物館の所有になっており、われわれがその前に立った時、いかに口惜しい気がするであろうか。いやな感じがすることは確実だろうと思います。

日本の文化財が文化上の後進国のごとく多量の流出をしていないことは、半面すぐれた日本の文化財について欧米の一般人が理解を持っていないことになり、日本についての正しい判断をできにくくしている一因と思います。

ミロのビーナスが日本にきたように(私が行った時はルーブルに戻っていました)完全な保障のもとで日本の文化財を一時的に他国の博物館に貸してあげるようにすればよいと思います。

唐の太宗・李世民の愛馬颯露紫の石像彫刻は唐代彫刻の名品で、現在アメリカのフィラデルフィア博物館にあります。大英博物館にあるのは銅製のコピーです。しかしながら荘重、厳粛、雄大な気品にみちた作であることはこのコピーにさえにじみ出ています。唐の建国にさいし、父李淵をたすけて東奔西走、自ら陣頭に立って戦った勇将李代民。彼の愛馬荘露紫は落陽付近の戦いで敵の流れ矢を胸に受けました。家来の兵行恭が馬の胸につきささった矢を抜いています。彼の奮戦がほうふつとしてきま

す。

彼の政治は「貞観の治」といわれるみごとな政治です。「貞観政要」などには「政治は民生を安定させることが大事である」とか「君主は国家最高の公僕である」ということばが見えます。

フランスの啓蒙思想には、中国の天の思想や、李代民の思想がとりいれられていると考えられます。(ヤソ会宣教師たちが中国に来てこれらの思想をヨーロッパに伝えました)ボルテールは中国研究の大家でありましたし、重農主義者のケネーは李代民の崇拝者でありましたし、プロシアのフレデリック大王は李代民死して千年以上隔たった後、同じことばを口にしています。

見落とした多くの作品に後ろ髪を引かれるような思いをしながらバス乗り場に急ぎます。

ウインザー城行きのバスはアメリカ人の観光客でほとんどいっぱいでした。すぐにミネソタのグロンウエル夫妻と仲良しになりました。(別れるとき、グロンウエルさんはクリスマス・カードを送ると約束してくれました)

バスの運転手は運転中ガイドといっさい話をしません。もちろん客とも話をしません。これは事故をおこさないために当然のことだと思います。

唐の太宗、李世民の愛馬颯露紫の彫刻(大英博物館で)

坂出高校教諭　白川隆久

⑨

ウインザー城　大英帝国をしのぶ
ノルマンの門九百年の歳月誇る

ロンドン

バスのガイドは堂々たる男性、よく勉強しており、なかなか権威を持っています。説明中、話をしていると「失礼だ」としかられます。このガイド氏、バスを降りての休憩中私たちに話かけてきました。君たち二人は日本人だろう？自分は鈴木大拙の禅についての著書を熱心に読んだ。日本へぜひ行きたい、とくに奈良、京都を見たいといっていました。

ウインザー城のすぐ近くにイートンがあります。イートン校の周辺は青々とした草木が続き、非常に美しく閑静な教育の町です。イートン校庭ではサッカーが行なわれていました。ガイドは「ワーテルローの勝利はこの運動場でつくられた」といいます。ウエリントンが天下分け目の決戦、ワーテルローの戦いでナポレオンの猛攻をくいとめた敢闘精神はこの運動場で鍛えられ、つくられたということでしょう。ここに学ぶ学生は上流階級の子弟が多く第二のウエリントンやグラッドストーンたらんと誇りと自覚を持って学んでいます。三々五々と連れ立って歩いている学生の服装も折り目正しく書物を手にした彼らの表情はプライドに満ちていました。

ウインザー城に到着しました。一〇六六年、イギリスに攻めこんだウィリアム一世（ノルマン。コンクエストーフランスのノルマンディー公爵が王位継承を主張して攻めこみイングランド王になる）によって建てられた名城です。その後、歴代の王によって使用され、増改築されて今日に至っています。城のほぼ中央にそびえ立つ大円塔（日本の城では天守閣にあたる）はウィリアム一世にはじまり、ヘンリー二世によって完成され、ノルマンのとりでの様式をのこしています。大円塔の横手にノルマンの門があります。ウインザー城の中で最も古い建造物で九百年に近い歳月をへています。

この門をくぐって城の奥の方へ行きますと政庁やイギリス王室の現在の邸宅があります。政庁には歴代の王および女王の応接室、舞踏室、謁見室など多くの室があり、それぞれがレンブラント、ルーベンス、ヴァン・ダイクらの名画（肖像画が多い）によって飾られています。絵画だけでゆうに三百点は越すと思われます。家具・調度品の類もけんらん華麗をきわめ、大英帝国花やかなりし時代をしのばせます。

武器類を陳列した室には西欧の甲冑や世界中の刀剣が集められており、中に四、五本、日本の名刀も見かけました。ロンドン塔内の武器陳列室でも感じたのですが、西欧中世の武器は剣にしても鋭さだけですし、甲冑にしても鋼鉄の地はだむき出しで実用的ではありますが芸術的なかおりに乏しいと思いました。これに比べて、平家物語に出てくる武者姿は「馬に金覆輪の鞍おいて、赤地の錦の直垂に、唐綾縅の鎧きて、黄金造りの太刀をはき、鍬形打ったる兜の緒をしめ」であって、戦場に臨む若武者のりりしい姿は色彩感にあふれ一幅の絵巻き物を思わしめ、また刀剣の持つ高い芸術的かおりは戦乱の激しさをさえ忘れさせるほどです。

ウインザー城を出てからバスはテームズ川に沿ってロンドンに帰ります。このあたりのテー

ムズの流れは緑色であり、川幅は狭く、岸辺を飾る樹木も青々として美しく、スモッグのロンドンの暗さに比し、明るい陽光を一杯に受けています。

バスを降り、宿まで地下鉄で帰ることにしました。地下鉄乗り場はエレベーターで降りました。非常に深いところを電車が走っています。第二次大戦のときドイツの爆撃機メッサーシュミットの猛爆撃をうけたロンドンでは大英博物館の文化財をこの地下室に入れて保存したということですが、なるほどと思われるくらい深く掘られています。

電車はラッシュ時で大混乱でした。先を争って乗る光景はいずこも同じで、そこには先着順も秩序もありませんでした。電車を降り、今度は木製のエスカレーターで昇り地上に出ました。

夕やみ迫る路上を、長谷川さんと二人、からだはくたくたになりましたが、みのり多かったきょう一日の数々の思い出を語りあいながら宿へと道を急ぎました。

ウインザー城(正面、国旗の立っているのが大円塔)

坂出高校教諭　白川隆久

⑩

ロンドン塔　十六世紀に大城砦

再三増・改築を行なう

ロンドン

ロンドン塔は単なる塔ではありません。城砦（キャッスル）であり、獄舎です。

今から二千年ほど前、ガリア（今のフランス）に根拠をおいていたシーザーはローマ軍団をひきいてドーバー海峡をこえてブリタニア（イングランド）を征服しました。ケルト人の守っていたリンデンはローマ軍に占拠され駐とん軍の陣地になり、ロンディニウムといわれます。これが現在のロンドンで、ロンドン塔内およびウォール街（ウォールは壁の意）で当時のローマの城壁を見つけることができます。（第二次大戦で独軍の猛爆をうけた被災地の地下からローマ時代の浴場、水道、貨幣などが発掘されました。）

ローマ軍団の駐とん地はイギリスの各地にありました。チェスターやカスターが末尾につく地名はラテン語のカストロ（陣地）からできた地名で、ランカスター、ウインチェスター、ロチェスターなどたくさんあります。

さて、ロンドン塔はこのローマ軍団の陣地の中に建てられた牢獄の跡に建てられたものです。一〇六六年、イギリスに攻めこんだウイリアム一世はガンドルフに命じて、この城をつくらせますが、現在のホワイト・タワーは当時のものと思われます。その後、再三、増・改築が行なわれ、十六世紀にはほぼ今日のような大城砦になりました。

「ロンドン塔の歴史は英国の歴史をせんじつめたものである」と漱石は書きました。まさにこの城こそは多くの人命をあの世に送った。血ぬられたイギリス史の代表的建築物です。

血塔ではバラ戦争（十五世紀、イギリス王家の内紛）にまつわる二王子暗殺の物語りがあります。エドワード四世の弟グロスター（後のリチャード三世）は王位をねらいエドワード四世を暗殺し、彼の二王子をこの塔に幽閉し、刺客に命じて締め殺させます。"「命さえ助けてくるるなら伯父さまに王の位を進ぜるものを」と兄が独り言のようにつぶやく。弟は「母様に逢いたい」のみいう。" 漱石はこの哀れな二少年の殺されたもようを刺客のことばを通じて表現します。"「締めるとき、花のような唇がぴりぴりとふるえた」「透き通るような額に紫色の筋が出た」"

城の西側の一角にボーシャン塔があります。"「ロンドン塔の歴史はボーシャン塔の歴史であって、ボーシャン塔の歴史は悲惨の歴史である」「この室に入るものは必ず死ぬ。生きて天日を再び見たものは千人に一人しかいない」" 漱石の文も熱がはいっていると感じます。

タワー・グリーン（中庭）には処刑されたアン・ボレインやジェン・グレイの名を書きつらねた文字板がありました。私は今から読者のみなさんを、十六世紀、イギリス王室の血なまぐさい闘争の歴史と物語りの世界に誘いましょう。

ヘンリー八世（チューダー家）は最初の王妃カザリン（スペイン王の娘）との間に一女メリーをもうけましたが、ウインザー城でコケティッシュなアン・ボレインを見そめ、カザリンを離婚し、（これが契機となってローマ法王と絶縁し、宗教改革がおこなわれます）アン・ボレインと

結婚し、一女エリザベスをもうけます。うわ気なヘンリー十八世は美しく清そ(楚)なジェイン・シーモアと恋におちいり、アン・ボレインが邪魔になったので彼女に姦通罪の罪名をきせます。「なるようにしかならないものを…」のことばを残して彼女はロンドン塔に送りこまれ、露と消えます。(エリザベスはしたがって私生児とされました)ジェイン・シーモアは一男エドワードを生んで死にます。ヘンリー八世が一五四七年に死にますと世継ぎのむすこエドワード六世は十歳で王になります。新教主義のノーザンバランド公は幼王をあやつり新教がさかんになって行きます。即位後六年にして病弱なエドワード六世は世を去りました。このあと、王位につくべきは、メリー・チューダーのはず、ところがノーザンバーランド公は旧教徒(カトリック)であるメリーの即位を恐れ、偽作の遺言書にジェイン・グレイ(ヘンリー八世の父ヘンリー七世の曽孫)を王嗣と書き込みます。

【注】夏目漱石の「倫教塔」の引用にあたりまして、若い読者のために新仮名づかいを使用させていただきました。

ロンドン塔

坂出高校教諭　白川隆久

⑪

堂々たる寺院や橋

テームズ河に「歴史」の匂い

ロンドン

ジェイン・グレイの夫ダッドレーはノーザンバーランド公の子息で、愛する夫と義父から説きふせられた彼女は、いやいや王位につきました。しかしメリーは旧教徒の支援をうけて攻め上り、ジェインらは捕らえられロンドン塔へおくりこまれました。

彼女の最後は漱石の筆致によれば"「わが夫ギルドフォード・ダッドレーは既に神の国へ行ってか」と聞く"改宗を迫る旧教僧に対し、彼女はそれを肯せず、"「吾夫が先なら後付う、後なら誘うて行こう。」正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」と云い終わって落つるが如く首を台の上に投げかける"大斧はきらめいて、英国一の才媛と謳われた十八歳の彼女の首は地に落ち、鮮血はあたりを真紅にそめて行きました。

メリー女王のもとに旧教が復活します。異母妹エリザベスは女王の命によってロンドン塔へ幽閉されます。エリザベスにとって不安と焦燥と忍耐の日々が続きました。しかし彼女に幸運の星が訪れます。メリーは一五五八年にこの世を去り、イングランドの王冠はエリザベス一世の頭上に輝きます。

私たちの団体がロンドン塔を訪れた日は霧の町ロンドンには珍しく、秋晴れの明るい陽光がロンドン塔内十三の塔にふりそそいでいました。しかも多くの団体客がゴッタがえし、塔内はにぎやかさと笑いの渦であり、多くの人が愛想の好いビーフ・イーター(守衛・頭に大きい、ふさふさとした帽子をかぶり、上衣は真紅、横に一本バンドのような白色のアクセサリーがあり、ズボンは紺色)をとり囲んで写真の撮影に余念がありませんでした。このような情景の中では漱石の描いたようなロンドン塔の印象はとてもでてきません。もしそれを求めるなら、霧が立ちこめ、さらには雨のシトシトと降る夕暮れ時、観光客のいないときを見はからって、ただ一人ひっそりと入ることが必要でしょう。

ロンドン塔のすぐ近く、テームズ河にタワー・ブリッジがかかっています。紫がかった色のゴシック式の二つの高い塔が印象的です。この辺りのテームズの流れは紺色が強くなって、ウインザー近辺で見た河水の暖い感じの青緑色はみられません。冷やかな重苦しい感じが河面から立ちのぼって来るような気がしました。

シティ(古ロンドン)の中心になる建物は、セント・パウロの寺院です。一六六六年大火があってシティの大半が焼失してしまいました。天才建築家クリストファ・レンが現われてロンドンの再建を行ないます。この寺院も彼の傑作で堂々たる聖堂です。ネルソン・ウエリントンなどの墓はこの寺院の地下室にあります。

ネルソン、この有名な海軍提督の銅像はトラファルガー・スクウェアー(スクウェアーは広場の意)の記念塔(高さ五十メートル)の上に立っています。トラファルガー沖海戦でフランス海軍を破り、ナポレオンのイギリス本土上陸作戦の野望を粉砕し、自らは壮絶なる戦死をとげた海上帝国の英雄は「余は祖国に対

して義務を果たしえたことを神に感謝する」とのことばを最後にその生涯の幕を閉じました。

私がロンドンに到着した日はイギリス総選挙の投票日でした。結果は翌日私たちの耳にも入りました。労働党は小差で保守党をやぶり(最後結果は十三議席の差でした)ウィルソン氏が政権を担当します。エリザベス一世のような顔をしたホテルのメイドさんが報らせてくれました。

世界でもっとも早く議会政治の進んだ国、二大政党による政権の交替がまことに巧妙に行なわれた国であることは周知の事実です。イギリスの二大政党は、名誉革命のすこし前ホイッグ党とトーリー党が結成され、第一次選挙法改正(一八三二年ごろ、ホイッグは自由党、トーリーは保守党と改称され、ビクトリア女王時代の偉大な政治家ディスレリー、グラッドストーンらによって巧妙に運営されて行きます。

労働党はフェビアン協会、労働代表委員会を経て今世紀初頭に労働党として名乗りをあげます。自由党は第一次大戦後勢力が減退し、保守党と労働党に吸収され、今回の選挙でも九人の当選者を数えるのみでした。

労働党にとっては第五回目の、政権担当になり(一、二回は第一次大戦後のマクドナルド内閣、三、四回は第二次大戦後のアトリー内閣)十四年ぶりの政権の座です。しかし労働党の当面している問題、否、イギリス全体が直面している前途に極めて多事多難です。(ポンド危機、生産性向上、EEC加盟問題等)イギリス国民はこれらの難問とどう取り組み、歴史の歯車をどのように回転させて行くのだろうか。

テームズ河にかかるタワー・ブリッジ

坂出高校教諭　白川隆久

⑫

西独最古の大学も

人々の態度は親日的

ハイデルベルグ

私たちの乗った飛行機は西ドイツのフランクフルト・アム・マインにつきました。フランクフルトとだけいわないで、アム・マイン(マイン川ぞい)とよぶのは東ドイツにもフランクフルトがあってそれと区別するためでしょう。

フランクフルトから古城と大学の町ハイデルベルクまでは約百五キロあります。日本を発つ時からどのような手段でハイデルベルクまで行こうかとずい分思案を重ねました。アウトバーン(ヒトラー以来の高速道路)をタクシーでとばせば多額な料金が必要だろう。何とか安く行ける方法はないだろうか。結局は「案ずるより生むが安い」ということばどおりになりました。

ホテルはフランクフルト中央駅のすぐ近くにあるカールトン・ホテルでしたので、夕食後駅のインフォメーション(案内所)へ行き、たどたどしいことばで説明を求めます。

フランクフルトといえば、西ドイツ有数の商工業・経済の中心地、その中央駅というのだから、さぞかしりっぱな駅で内部も複雑になっているだろうと不安がっていましたところ、案に相違して十三番線までしかなく、それが全部並列していて地下も高架もありません。東京駅や大阪駅を見慣れている人には子供だましみたいです)道路の多い欧米では汽車は斜陽化しつつあるのだと思います。

インフォメーションでハイデルベルク行きは十三番線(左端のホーム)だと教えられ、乗車場所を確認し、さらに切符売り場も確認しておこうと十三番売り場へ行き、念のために聞くだけにしておこうとしましたのに(往復料金はいくらかと聞いたのに)切符を渡されてしまいました。「あすの朝だ」(トウマロー・モーニング)といえども通じず、にこにこしているだけ、しかたなく料金を支払います。往復十三・六マルク(日本円、約千二百円)。

翌朝、昨夜確認しておいたおかげで、午前八時すぎ発の汽車にゆうゆうと乗り込むことができました。乗り込んで五分ほどしてはいってきた外人女性から「これはハイデルベルクへ行く汽車ですか」と尋ねられ「そうです」と答えたもののちょっと心配になって、またホームに出て駅員に確認しました。

汽車は広軌で客席はゆったりしています。一車両の定員は日本の国鉄の半分ぐらいです。座席は向かい合わせですが、後ろにバスケットが備えつけられ、荷物置き場になっています。検札にきた車掌にハイデルベルクは何番目の駅ですかと尋ねると、六番目とのこと。この車掌さん、汽車がマンハイムを出るとすぐ私のところへきて、次の駅だと教えてくれました。私のさげているカメラを見て説明を求め、ユーモアたっぷりの態度で車中の私を撮ってくれました。(かなりうまく撮れていました)

ハイデルベルク到着、今度は市電に乗ります。大学や古城のあるところは五番線に乗り、ウニブラッで下車します。料金は四十ペニッヒ(日本円、約三十六円)。ここでも親切な老教授風の人が降りる場所を指示してくれました。ドイツ人は一般に親日的で、非常に親切です。これは国

情に何か似かよったところがあり、歴史的にみても伊藤博文らの明治憲法、さらには第二次大戦における三国同盟なども影響しているのかもしれません。

土地の人たちがここをウニプラッツとよぶのは、「ラテン語ワニベルシタス(大学、英語ではユニバーシティ)の語から出たものと思いますが、ウニフェルジテートとドイツ語によばない理由は浅学の私にはわかりません。

西ドイツ最古の大学がここにあります。この大学は十四世紀末、ファルツ選帝侯(中世のドイツでは皇帝は選挙によって決められ、有力諸侯が皇帝選挙権を持っていました)ルプレヒト一世の創建によるものです。

デコボコの石畳の道を大学に沿って歩くころには、朝からの小降りの雨が本格的になってきました。日本からの持参の折りたたみのかさをさして歩きます。大学は一つの構内にまとまってなく、各学部別に建っています。大学のはずれから背後にあるケーニヒシュトウルの山腹にある古城をめざして登りはじめます。

ハイデルベルク大学の一角

坂出高校教諭　白川隆久

⑬

随所に当時のまま

中世の哀歓刻む石段

ハイデルベルグ

黄色く色づいた落ち葉を踏みしめながら、できるだけ近道をえらんで登ります。ところが細道は民家の庭の中へはいって行きどまり、困ったなとうろうろしていたら家人が見つけ室から飛び出してきて、裏の戸を開けてくれると、そこには石段の道。「ダンケ・シェン」と礼をいい、急な道を登ります。石段は真ん中の部分が多くの人たちの足跡によってすり減りくぼんでいました。

この石段の一段一段に、過去数百年の人たちの哀歓が刻みこまれていることでしょう。ある時は学生の一団が青春の歌を歌いながら、肩組み合わせてこの石段を登ったことでしょう。あるときは、失恋の胸のいたみにじっと耐えながら、一人黙々と歩んだ人もいるでしょうし、またあるときは、カール・ハインリッヒ(アルト・ハイデルベルクの主人公)のような貴公子が自由を喜びながら、一段一段を跳ぶようにして降りることでしょう。

やがて城壁の一角にたどりつきます。古び崩れかかった城壁の薄茶色と、木々の織りなす緑と黄の配色は、このあたりの閑静さと相まって、私を恍惚境(こうこつきょう)に誘いこみます。

石段のつきるところは古城の入り口になっていました。

城内の一角からながめる景観はまことにすばらしい。ネッカー河の流れの向こうに対岸の山がかすんで見え、流れのこちら側には細長いハイデルベルクの町全体がひろがっています。中に一きわ高い聖霊教会の尖塔が印象的です。ハイデルベルクはアメリカナイズされ、観光客や米軍人が多く、俗化しつつあるとホテルの人から聞いて不安の念を抱いてきたのですが、霧と雨に煙る一日であったが故に訪う人もまれな古城で中世的な幻想に心ゆくまで浸ることができたのでしょう。

内部の城門をくぐります。古色蒼然とした城門、くずれかかったへい、おそらくは籠城用と思われる大きな井戸、城壁にまつわりつくツタ、カズラの類、ルネサンス時代の様式で増改築が行なわれているとはいえ、ウインザー城やロンドン塔のように改修が加えられ整備されているのに比し、ここでは典型的な古城を見ることができます。この城は十三世紀前半、ファルツ伯、オットー・フォン・ヴィッテルスバッハの創建によるもので、当時のままのものが随所に現存しています。

城内の博物館には大きな酒たるがあり、その中の最大のものは約百二十石入り、木製でりっぱな装飾がついています。私が最も興味を覚えたものは、中世及び近世初期の薬天秤、乳鉢、薬品の類でした。

金の装飾のついたもののものしい天秤で計られた薬品類はどんなものだったのでしょう。各種の薬ビンが並んでいましたが、それらは植物性のものもあれば鉱物質のものもあります。黄金と同じ目方で取り引きされたといわれるコショウ、肉桂、丁香などの香辛料(スパイス)がありました。香辛料の中でもコショウ(ペッパー)は中世の無味乾燥な食生活の調味料としても、食肉保存の防腐剤としても必要欠くべからざるものであり、しかもそ

れがヨーロッパには産せず、インド、特にインドネシアのモルッカ諸島が原産地であったため、多くの商人の仲介と、途中の国々の高率通行税によって想像以上の高値となりました。ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見も、コロンブスの新大陸発見も、香料、なかんずくコショウの原産地の直接取り引きの要求が動機になりました。その点ではコショウは世界史を動かしたといえます。

砒素や昇汞(しょうこう)塩化第二水銀)のような毒薬もありました。学生時代に読んだマキアベリーの「マンドラゴラ」を思い出し、この毒薬を懸命にさがしましたが、それは見つかりませんでした。ヨーロッパの近世初頭は絶対主義時代で領土の相続は血統によって行なわれた時代です。それだけに相続をめぐってさかんに毒薬が使われ、毒薬は「相続散」とまで呼ばれました。

ハイデルベルク城門

坂出高校教諭　白川隆久

⑭

陽光にはえる古城

田園風景に「中世」連想

ハイデルベルグ

城内の売店で、何か記念になるものをと物色し、小さい木彫りの馬が気に入りましたが、値段が四十マルク(日本円、約三千六百円)もするのでやめました。日本ではせいぜい五百円ぐらいのものでしょう。欧米は労働賃金が高いので、民芸品はすこぶる高く、いたるところで買いそびれました。結局買ったのは、絵はがき少々とカラー・スライド一枚。それと、今は病床に臥している学を好む二人の同僚のために、学問の町のみやげこそ最適と考え、ハイデルの図案入りの銀のサジを二個買っただけに終わりました。

城を出て坂道を下り、町中を通り、アルテ・ブリュッケ(昔の橋)を通ってネッカー河を渡ります。ネッカーの流れは濃いアイ色で川舟が上り下りしていました。川を渡った右岸からの眺望は、橋のたもとに橋門があり、その背後に聖霊教会がそびえ、山の中腹に古城がたたずまい、その左手に古い城壁が連なる姿が一望の中におさめられます。古地図を見ますとその城壁は川の岸までのびていたようですから町全体が城壁にかこまれていたわけです。このように城壁で囲まれた中世都市をブルク(ブルク、ブルヒ)といい、ハンブルク、アウグスブルク、ニュールンベルクなどその例です。また城壁内に住んだ市民をブルジョワジーと呼びました。(現在は有産階級をさすことばに転化しています)

ハイデルベルクからフランクフルトまで帰りの汽車は一時間、途中車窓から眺めるドイツの森の多い田園風景に、ありし日の中世荘園の姿を思いうかべました。

さすがに連日の疲労はおおいがたくやがてアゴが出てきます。そういえば、ハイデルベルクはハイデルベルク人とよばれる原始人類(今から約三、四十万年前の人類)の化石が発掘されたところで、昔々の人はロング・ロング・アゴーだったなとひとり苦笑いたしました。

デンマークのコペンハーゲンからヘルシンガーへも汽車で行きました。同行者は三人です。

デンマークとスウェーデンとの間の狭いスンド海峡に面したこの港町には、大小さまざまの船が停泊しており、海岸に沿って歩くこと約十分、「ハムレット」で有名なクロンボルグ城(英名、エルシノア城)につきます。

"エルシノア城。胸壁の上の歩廊。左右に塔の扉。星明り、厳しい寒さ"ではじまるシェークスピアの「ハムレット」。父の亡霊が毒殺されたいきさつをハムレットに説明する陰惨な光景を想像してきたのですが、この日は晴天、城内到るところに陽光が照りはえ、海面をすべるように吹きよせる海風はハダ寒さを感じさせはしましたが、暗澹(あんたん)たるかげりはどこにも見出すことができませんでした。

この城の起源は、古くはデーン人(デンマークに住んだノルマン人)の海賊のとりでであったようですが、城塞(さい)としてのまとまりを持つようになったのは、十五世紀、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンを領有していたエリック王がこの狭い海峡を通る外国船から通行税を取り立てるために築いてからのこと、さらに今日の城の形に

整ったのは十六世紀末フレデリック二世のときです。

海峡をのぞむ保塁の上に並んだ大砲が通交税を無視した艦船を撃沈したこともあるのでしょう。砲口の指す彼方を見れば、対岸スウェーデンを指呼の間に望むことができました。

時間に追われて帰りはタクシー、年老いた運転手はコペンハーゲンまでの道程を無理と考えたのか、途中、自宅に立ち寄り、家畜の世話をしていたむすこさんにバトン・タッチ。奥さんも出てきて老運転手が紹介します。素朴で心暖かなデンマーク人に接して、心が豊かにふくれ上がるのを感じながら車中の人となります。

【注】ロンドンからウインザー城行きのバスの中で親しくなった米人グロンウェル夫妻からのクリスマス・カードが十五日に届きました。

クロンボルク城(エルシノア城)

坂出高校教諭　白川隆久

⑮

複製にない良さ

「モナ・リザ」に接し満足

パリ

とうとうパリにやって来た。そうしてめざすルーブル博物館にたどりついた。ただし私に与えられた時間はわずか半日足らず。

ルーブルは巨大な博物館だ。もともとは巨大な宮殿であった。それを博物館に転用したのだが、この中に収蔵されている遺品は整理されているものだけで約二万点といわれる。ここを訪れる観光客の多くは「ミロのヴィーナス」とレオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」とミレーの「晩鐘」を見て満足して帰る。

ドウノン入り口から館内にはいる。絵葉書、案内書を売る広場があり、そこで入場料を支払う。料金は一フラン(日本円七十三円)ルーブルの中へはいった私は激しく迷った。何を見るべきか。オリエント・ギリシア、ローマの遺品を中心に見るべきか、それとも人並みに泰西の名画を中心に見るべきか。迷いに迷ったすえ結局前者は大英博物館でかなりなものを見たので割愛し、後者を見ることに決心した。

モナ・リザ(ジオコンダ夫人の微笑)はやはりルーブルの至宝だ。この広い館内でいつも人の絶え間が無い。十人から二十人くらいの人がいつもその前に立ち停まっている。縦一メートル余りの思ったより小さい作品はガラスでおおわれ、画面との距離二メートルくらいで綱が張られている。今まで複製で見た多くのモナ・リザはどれも原画を忠実に写し出してはいない。原画は背景の緑が濃くて、画面全体から深淵、幽玄な感じが漂うのだ。

歴史家の根性は情けない。純粋な芸術鑑賞に時を費やそうと絵画、彫刻に身をまかせたのにもかかわらず、絵画の中で目にとまり私をひき寄せる引力の働くものが歴史に関係のあるものばかりなのだ。

宮庭画家ダヴィッドの「ナポレオン一世の戴冠式」畳二十畳の大きさを優に越すこの大作はどのようにして、ここに運びこまれたのだろう。私のスライド用のカメラがこの大作を隅から隅まで確実にとらえているのだから、一つの画廊がいかに大きいかがわかろう。

ドラクロアの絵画が私をひきつける「キオス島の虐殺」は三メートルに四メートルの絵、オスマン・トルコ帝国の支配下にあったギリシャの独立戦争と関係深い絵である。

「一八〇三年七月二十八日、民衆をひきいる自由」(七月革命の図)は同時代に生きた彼の絵だけに市街戦の描写に迫力が感じられる。

小品ではあるが、私をひきつけて離さなかったのはホルバイン描くところの「エラスムスの像」であった。とがった鼻、きっとしまった口もと、眉間に漂う気品は知性と教養を端的に示している。十六世紀最大のヒューマニスト(人文主義者)ロッテルダムの生まれのエラスムスは「愚神礼讃」を書いて痛烈にローマ・カトリック教会の腐敗堕落を風刺する。しかしこのインテリジェンスにみちた男はペンのみによって行動を伴わない。ルッターの宗教改革の誘いにも、最愛のでしであったフッテンらの騎士の乱にも彼は一顧だに与えない。

すぐかたわらにカザリン・ド・メジチの若い頃と年老いてから

の肖像画が並べられている。
イタリア、フローレンスの財閥メジチ家(前期的商業資本家)からフランス国王アンリ二世の妃となったカザリン・ド・メジチの若かりしころの肖像画は、目はくるくると愛らしく彼の純な心の美しさをそのままに表現している。しかし厳しい政治の現実の前に権謀術数を体得した彼女の晩年の相貌には「セント・バーソロミュー大虐殺事件」の張本人として「鬼婆」の異名をとった激しい表情が対照的に浮かび上がっている。
刻々と時間は移りルーブルを後にしなければならなくなる。日本をたつ時、寸暇を惜しんで下調べをし、ルーブルのオリエント室(二十三室もある)の第十二室に、ササン朝ペルシャからイスラム時代にかけての遺品が収蔵されており、ぜひ見たいと熱望していたのに、それを果たせなかった後悔の念に胸うずきながらルーブルを去る。

ミロのヴィーナス(ルーブル博物館で)

坂出高校教諭　白川隆久

⑯

「革命の嵐」にふける

栄華のあと「ベルサイユ」

パリ

パリからベルサイユまでのバスは午前九時ごろ、コンコルド広場を出発する。前日、ホテル・マリアンヌの帳場から電話で予約をし同行者も数人あったので小型バスがホテルまで出迎えに来て、広場で大型バスに乗りかえる。

バスはパリの南西約十八キロにあるブルボン王朝の栄華の跡、ベルサイユ宮殿めがけてまっしぐらに進む。ノートルダム寺院の浮き上がるシテ島から別れてセーヌを越える。この辺りから私は憶いを遠くフランス革命の時代に馳せる。道路は舗装され、ルノー車の行き交う道に代わったけれども両側には並木が連なり、二百年はけみしたであろう老樹も数多い。これらの樹々の中にはフランス革命の大きな一駒「ベルサイユ行進」を知っているものもあるはずだ。

一七八九年、絶対主義者積年の矛盾はついにフランス大革命となって奔流する。革命の指導者の中にはいつも天才的指導者がいる。突如パリからあらゆる食料品が消え失せた。「ベルサイユへ行けばパンがある。肉がある。」と扇動する者がいる。パリの民衆は婦人の群れを先頭にベルサイユめがけて突進し、ルイ十六世らをパリに連行した。疾風のような十月のある一日であった。

やがてルイ十六世は王妃マリー・アントアネットらとオーストリアに逃亡を企て失敗し、革命には加速度が加わっていく。一七九三年一月、ルイ十六世が、ついでにその年十月、マリー・アントアネットがジャコバン党の恐怖政治の中で断頭台の露と消えていく…。

やがてバスはベルサイユ宮殿正門前につく。絶対主義全盛時代、太陽王とよばれ「朕は国家なり」と公言しえたルイ十四世の命により、ルポォー、マンサール、ルノートルらによって造られた南北六百メートルの長さを持つ大宮殿が眼前に横たわっている。

内部は豪壮、華麗なバロック様式の各室が展開する。有名な「鏡の間」は幅十メートル、奥行きは七、八十メートルはあろうか、王朝時代の公式の大広間であった。金銀の燭台に灯りがともれば側面の鏡に乱反射して絢爛たる宮廷大社交場となる。

第一次世界大戦跡のベルサイユ条約もこの鏡の間で調印された。隣の小室に調印の行なわれた黒褐色の机があった。記念して「平和条約調印の机」(タブル・デ・ラ・シニャチュール・ドゥ・トレーテ・デ・ペー)と記され、一九一九年六月二十八日と書かれてあった。ウィルソン、ロイド・ジョージ、クレマンソーらと並んで西園寺公望が調印した光景がほうふつとして来た。

歴史の国王、王妃、女御の各室は家具、調度、装飾絵画に至るまで絢爛華麗眼もまばゆいばかりで、ありし日のブルボン王朝の権勢をしのぶことができる。

エリザベス・ルブラン描くところのマリー・アントアネットと三人の子供の絵は、大革命の嵐の回想の中へ私を引きこんで行って離さない。ロココの女王といわれた悲劇のヒロイン、マリー・アントアネットは別として、この三人の子供の悲劇を知る者は少なかろう。二人の少女と一人の少年のうち、革命の濁流を乗りきって生き残るのはただ一

人の少女だけ、特に哀れなのはこの少年、世が世であればルイ十七世ともなるべき皇太子が靴匠シモンにあづけられ、虐待され、ふろにも入れてもらえず、シラミをわかし、皮膚病にとりつかれて九歳の身空で生涯を閉じるのである。子供に何の罪があるのであろう。この子の運命に涙せぬ人はよもやあるまい。

この日の夕方、私は寸暇をさいて、タクシーでリュクサンブール公園へかけつける。

緑の芝ふの上の黄金色の落葉はそよと吹く風にも揺らぎそうな風情を漂わせる。美しい噴水のある庭園を通り、木立の中で「自由の女神像」をさがし求める。アメリカのニューヨーク湾頭で見た自由の女神は高さ四十六メートルの堂々たる白亜の像であった(フランスから贈られたもの)。その原型は彫刻家バルトルディの作、この木立の中にあるはずだ。仲々見つからず泣きたいような気持ちになりながら懸命にさがし、ようやくのこと等身大、青銅製の像を見付け出し、執念のシャッターを数枚程切る。

夕ヤミ迫る庭園をマロニエの落ち葉を踏みしめながら帰途を急いだ。

おわり

リュクサンブール公園内の自由の女神